

「山口の連歌と俳諧——宗祇から菊舎まで」展 概要

尾崎 千佳

本稿は、平成二十四年九月二十二日（土）から十一月十八日（日）にかかる山口市歴史民俗資料館平成二十四年度企画展「山口の連歌と俳諧―宗祇から菊舎まで」の概要報告である。

右記展覧会は、山口市歴史民俗資料館と俳文学会第六十四回全国大会実行委員会との共同主催による。俳文学会第六十四回全国大会は、平成二十四年十月六日（土）―十八日（月）、山口大学学生会館を主会場とし、尾崎千佳を実行委員長として開催した。学会開催を機に、中世から近世にかかる山口連歌・俳諧の歴史を山口市域に伝存する貴重資料によって概観することを企てた次第である。学会と歴史民俗資料館との連携は前例のない試みであったが、吉岡周三館長の格別のお取り計らいにより、企画は実現の運びとなった。また、同館学芸員の廣田野乃子氏・原崎洋右氏、熊谷理絵氏には多大なるご尽力を忝なくした。

準備の過程で新たに見出された資料も少なくなく、結果的に、副題に掲げた「宗祇から菊舎まで」の時代範囲を越え、室町中期から明治中期に至る約四百五十年間の連歌・俳諧資料五十五点を集める

ことができた。以下、記録のために出展資料の概要をまとめておく。複製および拓本・参考図版についてはタイトルを掲げるに留めた。

一 山口と連歌Ⅰ 宗祇来山―大内氏とその時代―

山口と連歌との関わりは、室町中期、大内政弘の時代に始まる。政弘は父教弘の嗜好を受け継ぎつつ、都の文化が地方に広がってゆく時代の影響を受けて、文事に著しく傾斜していった。応仁・文明の乱で京都に出陣していた政弘とその臣は、文明九年前後、当時都の連歌師として頭角をあらわしていた連歌師宗祇を陣所に迎えて連歌に興じる。帰国した政弘は、文明十二年、宗祇を山口に招き、太宰府をはじめとする歌枕・名所探訪の旅に送り出した。紀行文学の傑作として名高い宗祇『筑紫道記』は、この旅の所産である。宗祇は、長享三年にも山口を再訪し、大内館を中心とした数多の連歌会を励ます。その背景には連歌撰集編纂の志があった。交友を深めた政弘から物質両面にわたる支援を受けた宗祇は、明応四年、准勅

撰集『新撰菟玖波集』を完成させるに至る。宗祇以後も、兼載・宗碩・宗牧・周桂といった連歌師が大内氏の庇護を恃んで山口に向下し、大内氏の周辺では連歌が盛んに行われ、領国内には連歌作者が多数存在していた。

1 宗祇坐像

江戸時代極初期写 掛幅装一軸 山口県立山口博物館蔵
彩色の連歌師宗祇の坐像。衲衣に袈裟をかけ、左手に中啓を持ち、上畳のうえに左向きに端座した姿で描かれている。面長の顔貌、円頂、白く細い鬚髯まで、宗祇生前に成立した相良家旧蔵および南部家旧蔵の宗祇坐像の像容によく合致する。山口博物館本はもと豊浦郡某家の藏品という。大内氏周辺の人物の蔵する一本から転写された可能性も考えられようか。

上部右肩には二区の紅白色紙形が貼り込まれており、「宗祇老人肖像／うつしをくわが影ながら世のうきをしらぬおきなぞうらやまねぬる」(右・白)の和歌一首と、「世にふるもさらに時雨のやどり哉／としのわたりはゆく人もなし／老の浪いくかへりせばはてならむ」(左・赤)の連歌発句・連歌付句が認められている。「うつしをく」歌は、相良家・南部家本両本では三条西実隆の筆蹟にかかり(ただし、初句「うつしをくも」、坐像の制作にあたっての所感を宗祇が詠じた一首と推定されている。続く連歌発句・付句は相良家本にはなく、南部家本のそれとは異なっている。「世にふるも」句は『萱草』『新撰菟玖波集』所収、その詞書によって、応仁の乱の頃、信濃で

詠まれた一句であることを知る。ただし、慶長十八年成『寒川入道筆記』では、「宗祇辞世」として「うつしをくわがかげながら世のうさをしらぬ翁ぞうらやまれぬる」歌が書き留められ、続けて「同発句 世にふるはさらに時雨のやどりかな」と見えているから、右の一首一句は、近世には宗祇の辞世として伝承されるところがあったらしい。さらに、「としのわたりは」「老の浪」句は、『宗祇終焉記』に、文亀二年七月、鎌倉あたりで賦された連歌千句の付句として見え、宗祇の「今際のとぢめの句」という。かくて、本像の賛は宗祇辞世の意識で記されたものと見るべく、山口博物館本が宗祇の年忌にあたって利用されたことも想像されよう。

以上、もっぱら島津忠夫『宗祇の顔―画像の種類と変遷』(島津忠夫著作集別巻、和泉書院、平成二十三年)を参照した。

2 宗祇法師画像

元文年間期写 掛幅装一軸 山口県文書館蔵
淡彩色の連歌師宗祇の坐像。像容は1山口博物館本の宗祇坐像に酷似し、同じ祖本に基づくことが想像される。島津忠夫『宗祇の顔―画像の種類と変遷』は、山口博物館本・山口県文書館本および金子金治郎旧蔵本について、「山口周辺に古い画像の粉本が存在している、それをもとに作られているといったことが考えられる。その祖本の制作には、私は、大内氏とのかかわりが考えられるのではないかと思う」と指摘する。

上部には長文の宗祇伝が認められ、末尾に「右、宗祇(マ)法師伝／元

文□□□□□□周南 山県撰□□□□□□とあり、元文年間、山県周南の加賛と知られる。宝暦十年刊『周南先生文集』巻八に、ほぼ同文の「宗祇法師伝」が見える。需メめに応じた撰文か。

3 新撰菟玖波集拔書（大内家古実類書 卷三十一連歌之部のうち）

江戸時代後期写 大本一冊 山口県文書館蔵
多賀社文庫のうち。『大内家古実類書』は、山口多賀社大宮司高橋有文によって編まれた、全五十二巻より成る大内氏の故事逸文集である。有文は大内義隆に仕えた高橋右延・言延の後裔にあたる。

卷三十一連歌之部には、『老葉』『下草聞書』『兼載句艸』『宗碩下向於山口興行連歌』『大発句帳』等の諸書から、山口ならびに大内氏に縁ある連歌が抜粋して書き留められており、本書によってのみ知り得る連歌張行の事実も少なくない。『新撰菟玖波集』からは、持世・教弘・政弘の大内氏歴代に、藤原正存・門司武員・相良正任・門司宗忍・其阿をあわせた八名の付句・発句が抄出されている。うち、藤原正存は、大永本『新撰菟玖波集作者部類』が「細川家人、池田新左衛門尉」と注するように、撰津国細川被官の池田正存と推定される。ところが、『大内氏古実類書』所収『新撰菟玖波集作者部類』では、「藤原正存」を「大内々内藤内蔵助」と注記している。池田正存を内藤護道と混同したと思しいが、『大内家古実類書』が何に依拠してかく誤ったか定かでない。

4 宗祇山口下着後の連歌

昭和十三年写 大本一冊 山口県文書館蔵

長享三年、宗祇再度の山口下向時に興行された連歌会から、宗祇句のみを抜き出した抜句集。本書によって、五月八日から七月二十七日にかかる約三箇月の間に、大内家やその重臣たちの邸宅で十八回もの連歌会が持たれたことが知られる（尾崎千佳「宗祇の再度山口下向―『宗祇山口下着抜句』をめぐって」、『やまぐち学の構築』第四号、平成二十年三月）。

大日本史料第八編之三十二に陽明文庫本による翻刻が備わるほか、太田武夫氏蔵『宗祇付句』、国会図書館蔵『連歌合集』第三集所収本等の諸本がある。山口県文書館本の奥には「昭和十三年六月／＼麴池三吉写之」とあり、一面行数や字配りに徴して『連歌合集』所収本の転写本と推定される。

5 大内政弘詠草（大内氏実録土代）卷十のうち

明治三十九年写 大本一冊 山口県文書館蔵
近藤清石文庫のうち。『大内氏実録土代』は近藤清石が『大内氏実録』編纂のために調査筆録した史料の一で、本詠草は豊浦郡田部村山本清左衛門の所蔵にかかるという。

大内政弘が「竹霰」「千鳥」「短夜」の各題二首ずつ詠んだ和歌詠草に、当時山口滞在中の龍翔院三条公敦が添削を施し、判詞を与えている。政弘の和歌の実力を知るうえできわめて興味深い。

6 拾塵和歌集

昭和十二年写 大本一冊 山口県文書館蔵
大内政弘一代の和歌詠草二万余首のなかから、英因法眼・龍崎道

ついでには他に伝本を聞かない。①⑤⑥⑦⑧⑨の各百韻についても諸本の多くが江戸期の書写にかかるうえ、誤写の少なさに鑑みても、安部家文書本は紛れもない最善本と評せよう。

以上、上野さち子「宗牧独吟千句」（『山口女子短期大学研究報告』第十三号、昭和三十五年三月）、同「安部本宗牧独吟連歌集」（『山口女子短期大学研究報告』第二十二号、昭和四十二年十二月）参照。

10 老葉

江戸時代末期写 大本一冊 山口県文書館蔵

安部家文書のうち、連歌師宗祇のみずから選び自ら編集した宗祇の第二句集である。文明十二―十三年の宗祇初度山口下向時に詠まれた句が豊富に含まれることから、大内政弘に進献する目的で、文明十三年夏頃に成立したと推定されている（『伊地知鐵男著作集Ⅰ〈宗祇〉』汲古書院、平成九年）。

本書は、前半六巻分を欠くものの、本文を天理図書館綿屋文庫所蔵の室町期写本とほぼ同じくする初編本系統の一本である（貴重古典籍叢刊『宗祇句集』湯野上早苗解説、角川書店、昭和五十二年）。奥書「四月五日 伴太祐判／光祐判／出羽九郎次郎」。添付の石川卓美メモによれば、厚狭郡吉田の安部家蔵本からの転写という。

二 山口と連歌Ⅱ 町衆のなかへ―毛利氏とその時代―

毛利元就・隆元・輝元の三代も、戦国武将の例に漏れず連歌をみ

ずから嗜むと同時に、厳島神社への深い崇敬の念から、同社に寄進した天神社で月次連歌を張行させ、ときに戦勝を祈願しては千句や万句の連歌を奉納した。毛利氏の連歌活動を背後で支えていたのは、当代随一の連歌師、里村紹巴であった。紹巴と毛利氏との交流は関ヶ原の戦以降も継続し、慶長八―九年には一子玄仍が紹巴の名代として萩城築城祝儀の連歌を張行すべく、防長両国に下向している。以降、毛利氏の連歌は江戸時代を通じて、紹巴の子孫である里村北家の連歌師と深い結びつきを保った。

元和七年正月二十日、江戸城において新年を寿ぐいわゆる柳営連歌が興行されて以来、連歌は徳川幕府年頭の吉例行事となり、その宗匠は里村南北両家が代々世襲した。慶安四年四月二十日に徳川家光が没すると、慶安五年からはその忌日を避けて正月十一日が柳営連歌の式日となる。毛利家でも萩城や江戸藩邸で正月二十日に連歌を興行していたが、山口県文書館毛利家文庫蔵『於江戸御規式』によれば、慶安五年正月からはこれを十一日に改めて幕府の式に従っている。発句に「松」と「梅」を隔年交替で詠み込むのも、柳営連歌に準拠したしきたりであった。

いっぽう、萩御城連歌の最初期の連衆のなかに、大内時代以来の山口町衆、横屋栄直・長谷川休意・納屋春統等があった。彼等は、しばしば、在京中の紹巴や玄仍に書簡を通じた添削指導を請うて連歌を学んでいる。慶長―元和期、山口町衆の連歌は、毛利氏ゆかりの里村北家の連歌師の指導のもとに育っていった。山口道場門前の

豪商安部家には、寛文―正徳期の連歌懐紙が多数伝わっている。神事や年中行事として行われていた連歌が、しだいに文芸としての側面をつよめつつ、町衆のなかに浸透していったのである。

11 毛利輝元画像（複製）

掛幅装一軸 毛利報公会原蔵

12 玄仍連歌巻 里村玄仍筆

慶長八年写 卷子本一卷 山口県文書館蔵

慶長八年四月二十四日興行の懐旧連歌百韻懐紙を卷子に仕立てたもの。発句や脇句に応じた下絵が金銀泥で描かれた華麗な装飾懐紙で、表紙は木賊色地菊花亀甲繫に金糸唐草紋様絹本、見返は水浅葱地に淡彩色で松を描いた金泥霞引き金切箔散らし。端作「慶長八年卯月廿四日／懐旧之連歌」とし、発句は紹句の「ことこの葉に残りて花や夏木立」。連衆は、紹句・玄仍・昌琢・令・宗因・玄仲・一云・正甫・寿閑・道青・笠依・宗志・元通（執筆）。

巻末の添書によれば、可易・春統・宗発・堯栖・安勝・政重の山口連衆六名は、故人某を偲んで懐旧の連歌を興行すべく、山口本圀寺に参集しておのおの発句を詠み、京都の里村玄仍に送った。「詞に万事世上の体物残候所、珍候」との理由で選ばれた宗発句を発句として京都で百韻を満尾、玄仍みずから清書懐紙を調べて山口に返送したという。発句の紹句は横屋栄直こと宗発の別号か。可易は山口本圀寺、堯栖は山口妙泉寺の住僧。安勝は河瀬氏、春統は納屋氏、ともに山口の町衆である。政重は横屋宗発の弟子で石見江津の

人。当時京都にあつて玄仍と同座を果たしている一云は山口今天神の社僧で（以上、山口県文書館多賀社文庫「山口連歌師名乗付其外」等による）、彼等こそ草創期の山口連歌壇の連衆であつた。

13 山口多賀社御祭礼連歌懐紙

江戸時代初期写 卷子本一卷 山口県文書館蔵

多賀社文庫のうち。永禄十二年、大内輝弘の山口乱入により社殿を焼失した山口多賀社は、慶長十五年、毛利輝元によって再建された（「防長寺社由来」）。同十九年、当時十三歳の毛利就隆は三十六歌仙の和歌をみずから染筆して奉納し、翌二十年四月二日の正祭礼では、途絶していた法楽連歌も再興したという。本書には、江戸時代初期、山口多賀社の祭礼に際して奉納された法楽連歌百韻の懐紙断簡三種を収める。紺地に銀糸鳳凰丸紋様絹本表紙は近年の改装。

「をし鴨の」百韻断簡は、初折欠。黄蘗色染紙の連歌懐紙で、連衆は、成・氏女・午歳・辰歳・刁歳・子歳・桃・就隆・玄仲・休意・義次・応昌・俊賀・安元・重保・宗琢・賞白・定利・厚敬・隆哲・安信・清次（執筆）。「成」は初代萩藩主毛利秀就の一字名で、「午歳」は毛利輝元室清光院、「子歳」は秀就室龍昌院（「防長寺社由来」）。就隆までは各一句の出句で、毛利一族の句は里村玄仲の代作にかかると推定される。高野山興山寺の応昌や信州飯田藩初代藩主で武家歌人の脇坂安元等、当代一流の連歌作者が出座していることから、慶長―寛永期、京都もしくは江戸で興行されたあと、山口多賀社に送られた一巻であろう。

「苜つくす」百韻断簡は、初折および名残折欠。料紙奉書紙。見せ消ち修正がある。連衆は、宗達・玄祥・元可・就近・高重・就全・意安・玄春・就重・三折・清次・就貞・就由。正保―寛文期の興行か。「霞汲」百韻断簡は、初折欠。料紙奉書紙。連衆は、頼盛・昌悦・就幸・就辰・就全・印左・清閑・三折・宗隣・玄寄・就信・執筆。正保―寛文期の興行か。

14 賦山何連歌懷紙 里村玄仲筆

元和八年写 連歌懷紙一冊 個人蔵
元和八年七月十八日興行連歌百韻の懷紙。毎月十八日に興行されていた毛利家月次連歌の一で、句に詠み込まれた素材を金銀泥の下絵に描き、宗匠玄仲が清書した裝飾懷紙の尤品である。包紙表書の墨書「第一」は千句の一部であったことを示唆するかに見えるが、未詳。包紙裏には連衆の句上を計上したあとが認められ、さらに未詳鑑定家による連教師玄仲筆を証する極札が貼付されている。

端作「元和八年七月十八日」、賦物「賦山何連歌」とし、発句は「成」こと当主毛利秀就の「久かたの空に心や夜半の月」。連衆は、成（毛利秀就・本（毛利輝元）・松寿・午歳（輝元室清光院）・氏女・子歳（秀就室龍昌院）・御千代・就隆・於長・伊勢宮・長松・玄仲・紹三・以節・及佐・可心・元与・元助・正純・就次・重従・了佐・信良・清次（執筆）。包紙裏の句上では一巡冒頭十一名の句は「御作代 十一句」と纏められ、毛利一族の句は玄仲の代作にかかることが明らかである。

15 懐旧之連歌懷紙

正徳三年写 連歌懷紙一冊 個人蔵
正徳三年三月十四日興行懐旧連歌百韻の懷紙。上青下紫の打曇懷紙に清書されている。本点と16を収める包紙の表書に「上／小倉尚齋」とあり、興行主は享保四年に萩藩校明倫館の初代学頭となる実操こと小倉尚齋である。尚齋の祖実澄は近江国蒲生郡佐久良城主にして『新撰菟玖波集』作者でもあったが、尚齋の父の代に毛利氏の傘下に降った。儒を本業とし朝鮮通信使との唱和も果たした尚齋が、一面、和歌・連歌にも通じ、里村家連教師と交友したことが知られて興味深い。

端作「正徳三年三月十四日／懐旧之連歌」とし、発句は里村昌純の「三年もやなくは一声不如帰」。連衆は、昌純・実操・其阿・仍民。各自二十句ずつ付ける。

16 夢想之連歌懷紙

享保三年写 連歌懷紙一冊 個人蔵
享保三年九月吉日興行夢想連歌百韻の懷紙。上青下紫の打曇懷紙に清書されている。包紙は15に同じ。

端作「享保三^成年九月吉日／夢想之連歌」とし、夢想句「卯花や桜が後の白がさね」。連衆は、実操（小倉尚齋）・惣代・信政・信円・栄長・時一・祐重・昌築・執筆。

17 賦何木連歌百韻懷紙

寛文四年写 連歌懷紙一冊 山口県文書館蔵
安部家文書のうち。寛文四年五月吉日興行連歌百韻の懷紙。料紙

は素紙で、全紙にわたって字句訂正の書き込みが細かく施されており、当座もしくは直後の修正を反映した原懐紙と見られる。

山口道場門前の豪商で山口町の大年寄をつとめた安部家には、寛文―明治期の連歌懐紙十三編が伝わる（尾崎千佳「安部家連歌懐紙集成」、『やまぐち学の構築』第一号・第二号、平成十七年三月・平成十八年三月）。本

点はその最古の作品で、神事や行事としてのそれではなく、文芸としての連歌が、山口町衆の間でこの頃から試みられていたことを知る。

端作「寛文四年五月吉日」、賦物「賦何木連歌」とし、発句は未威の「豊なる世にやあふちの花の宿」。連衆は、未威・了知・道順・好勝・了芭・政嘉・可保・道磐・宗也・良尊・執筆。

18 賦何人連歌百韻懐紙

貞享五年写 連歌懐紙一冊 山口県文書館蔵
安部家文書のうち。貞享五年十月十九日興行連歌百韻の懐紙。上青下紫の打曇料紙に、桐・小菊・梅花・桜花紋様を青色で艶出しした装飾懐紙を用いる。

端作「貞享五年十月十九日」、賦物「賦何人連歌」とし、発句は信貞の「かへるさの山づとにせむ木葉かな」。連衆は、信貞・宗英・三省・包忠・良正・成重・貞式・好久・貞之。発句の信貞と脇句の宗英は安部家の人。貞享―正徳期、安部家では和歌・連歌の雅文芸をよくした。

19 賦唐何連歌百韻懐紙

元禄三年写 連歌懐紙一冊 山口県文書館蔵
安部家文書のうち。元禄三年七月二十七日興行連歌百韻の懐紙。上青下紫の打曇料紙に金泥で松竹・水辺等の下絵を描いた豪華な装飾懐紙に清書されている。

端作「元禄三年七月念七」、賦物「賦唐何連歌」とし、発句は里村昌陸の「涼しさは人の心をはじめ哉」。広島大学図書館蔵『穌漢聯珠』（江戸時代中期写、横本一冊）所収本の端作に「元禄三年七月廿七日／於京洛安部氏亭会」とあり、安部家の京屋敷で興行されたことが知られ、昌陸発句は安部宗英の清新な心意気に対する挨拶句と解せよう。連衆は、昌陸・方盛・宗英・直条・昌億・了瑄・由純・昌純・信貞・昌勃（執筆）。昌陸・昌億・昌純の里村南家連歌師、奥州仙台藩主伊達綱村に仕えた連歌師石井了瑄、昌純門の連歌作者黒川由純等、都の著名な連歌師・連歌作者を招いた晴の連歌会で、当時の安部家の豪奢を偲ばせる。

20 賦花之何連歌百韻懐紙

明治二年写 連歌懐紙一冊 山口県文書館蔵
安部家文書のうち。明治二年四月一日興行連歌百韻の懐紙。料紙は素紙。

安部家の連歌は享保二年二月十八日興行夢想漢和聯句を最後に途絶え、明和年間以降、同家の文芸は美濃派俳諧に移行するが、約五十年を隔てた明治期初頭、宗敬・宗賀の代に連歌復興の気運があった模様で、本点を含む三編の明治期連歌懐紙が伝わっている。

端作「明治二年四月朔日」、賦物「賦花之何連歌」とし、発句は磐作の「山口の茂り移すや祇の園」。連衆は、磐作・宗敬・宗賀・宗朋・英直・守英・正英・英知・朝英・光甫・光福・光成・惣代・執筆。

三 山口と俳諧 美濃派の伝来と広がり

江戸時代初期、上方を中心に興った俳諧連歌は地方にも伝播し、中国地方では山陽道に沿った地域を中心に俳壇が育ってゆくが、山口ではやや遅れ、江戸時代後期に至ってようやく俳壇が成立した。貞享―享保期には連歌を中心として安部家の文芸が、明和―寛政期になると美濃派俳諧に切り替わっていることに、俳壇成立の徴証を認めることができる。安部家における連歌から俳諧への転換の背景には、俳諧の全国的盛行のみならず、同家とその本業においてどのように上方の人々と関わったか、その頻度や程度の影響も考えられなければならない。道統の地方行脚を前提とし、橘屋治兵衛という専門書肆と密接に結びついた美濃派俳諧は、地方在住の富裕町人にとっては、近づきやすく親しみやすい当代文芸であったろう。かくして、山口における連歌と俳諧の画期は、上方よりおよそ五十年ほど遅れた江戸時代後期に求められる。安永三年には美濃派道統五世の以哉坊が、天明二年には道統以哉派六世是什坊の命を受けた百茶坊が、文政三年には道統以哉派九世友左坊が、防長両国に

来遊し、徳山・防府・山口には町衆の、岩国・萩・長府には武家中心の美濃派俳壇が形成され、幕末期にかけて発展した。そのなかから、女人ながら生涯を旅に送り独自の交友圏を築きあげる田上菊舎や、蕉風俳諧研究の大著を成す原田曲斎のような全国に著名な俳人も輩出された。

21 鴻嶺下

明和六年刊 横本一冊 山口県文書館蔵

安部家文書のうち。現存最古の山口美濃派の俳諧刷物で、明和六年の歳旦および春興句を集めた春帖である。高嶺の山麓にあったと道場門前の葉種商、宮武氏紫蓼園壺外の別荘にちなみ「鴻嶺下」と題された山口美濃派刷物は、明和六年から寛政二年までの十六編が現存する。鳥の子の料紙を用いた同一体裁の横本または一枚刷に、表紙は篆書体で「鴻嶺下」「周防」「周防山口高嶺下」「高嶺下」と大きく摺り出した簡素な意匠で、全編が京都橘屋治兵衛の板行にかかる。

本点は紅白の水引で綴じられており、外題「鴻嶺下」、端作「明和六丑のとし／防西山口連中」。巻頭の歳旦発句は壺外の「改て迎ふ氣にまた年ひとつ」、巻軸の歳暮発句も壺外の「ひとり年にふりにし軒の煤掃かん」である。連衆は、一步亭素文こと安部四郎右衛門俊英の他、独笑・一葉・大車・如舟・左琴等。壺外と素文は美濃派道統以哉派六世の是什坊に師事し、山口俳壇の中心的人物であった（原田由衣「近世後期における山口俳壇の形成」、『山口国文』第三十六号、

平成二十五年三月。

22 鴻嶺下

明和九年刊 横本一冊 山口県文書館蔵

安部家文書のうち。金箔押紙の平水引で綴じ、外題「鴻峰」。端作「明和九辰歳／周防山口」とし、巻頭の歳旦発句は紫蓼園壺外の「しつかりと歯固の餅いたゞかん」、巻軸の歳暮発句も壺外の「棚つつて恵方待ばやとし用意」。連衆は、安部素文の他、琴露 貫里・左丈・素明・桂兔・蘭雨・之流・梅之・梨更・花放・猶杪・一葉・左琴等。

23 高嶺下

天明八年刊 横本一冊 山口県文書館蔵

安部家文書のうち。金箔押紙の平水引で綴じ、外題「高嶺下」。端作「天明八戊申のとし／周防山口」とし、巻頭の歳旦発句は壺外の「自然とのぬるみ感じて初手水」、巻軸の歳暮発句も壺外の「目鑑入らずことしも尽ぬ古曆」。連衆は、安部素文の他、桃巴・其宥・緩花・瓢風・素遊・暁烏・蟠路・蘭葩・梨更・貫里等。

24 高嶺下

天明九年刊 横本一冊 山口県文書館蔵

安部家文書のうち。金箔押紙の平水引で綴じ、外題「高嶺下」。端作「天明九己酉歳／周防山口」とし、巻頭の歳旦発句は其意窟素文の「魁の初日むかえつ東かな」、巻軸の歳暮発句は彩蓼散人壺外の「明る春たのしみにとし守る夜かな」。連衆は、無荷・度江・其醉・如鶴・壺猷・冲羽・素風・貫里・右琴・東水・志逸・其宥・桃巴・

梨更等。

25 蕉門歳旦三物

寛政六年刊 横本三冊 個人蔵

美濃派俳書の専門書肆橘屋治兵衛が寛政六年に刊行した諸国の歳旦帖を集成した書。縹色無地表紙の中央に刷外題簽「巻門歳旦三物／次第（不同）」（第一冊）を貼付し、各冊本文冒頭右下に「此主」と朱書して瓢箪型朱印「石州／神原／遊仙楼」を捺す。

第一冊には美濃・伊勢・伊賀・三河・讃岐・阿波・土佐・浪華・播磨、第二冊には備前・石見・周防・長門・豊前・筑前・肥前・肥後・日向、第三冊には越前・越後・羽前・下総・出羽・京都・近江・紀伊各国の諸地域における寛政六年歳旦帖を収める。美濃派を中心に伊勢派・雪門・惟然門等、蕉門諸派の歳旦が含まれており、寛政六年当時の全国的な俳壇状況を見渡し得て貴重。防長両国では、徳山・徳地・三田尻・防府・富田・萩・長府・豊浦・赤間関の美濃派の歳旦が収録されている。

26 防府

寛政六年刊 横本一冊 山口県文書館蔵

安部家文書のうち。観龍亭東水率いる周防三田尻美濃派の寛政六年春帖。25中に同一の春帖を収める。

金箔押紙の平水引で綴じ、外題「防府」。端作「寛政六甲寅歳周防三田尻」とし、巻頭の歳旦発句は東水の「どちらでも連に任せむ恵方道」、巻軸は江戸在府中萩住信我の「元と木見ておのおの芽

張る柳かな」。連衆は、帰一・箸水・甫竹・百囀・里狂・自意・愚公・阿寂・琴和・不貫等。

27 長閑

寛政六年刊 横本一冊 山口県文書館蔵
安部家文書のうち。桃葉園葵之率いる長州赤間関の美濃派の寛政六年春帖。25中に同一の春帖を収める。

紅白水引で綴じ、外題「長閑」。端作「寛政六^{甲寅}／長州赤間関」とし、巻頭の歳旦発句は葵之の「門松やいづれ和らぐ国の風」、巻軸の歳暮発句は博和房の「春さらに月のひかりや雪のうへ」。連衆は、水応・巴水・可作・淇水・洞秋・奇梅・砂笛・甲衣・古秀・奇柳・三省・雨柳・烏笑・巴斗・松甫・綺江等。

28 不惑賀

宝暦十三年刊 中本一冊 山口県文書館蔵
安部家文書のうち。大和綴表紙の中央に外題を「不惑賀／山口雪洞庵」と打ち付けに刷り出す。内題「初老」。竹葉画中央に「初老」の二字を刷りこんだ書袋とともに伝わる孤本。

山口の雪洞庵湖天の四十賀を祝して編まれた俳書。湖天は半井氏、医を以て萩藩に仕えたが、京都遊学時代に仏・茶・俳諧の諸道に接し、琴棋書画にも精通していたという。不惑を迎えて医業を廃し、風流三昧の生活に入った。

十百庵老人の耳順に湖天の初老をあわせて百歳の寿を祝した半歌仙と、各俳家による賀吟三十八章を収める。山口の安部素文、嘉川

の其夕、宮市の白扇、宇部の温故、萩の怨風・嵐阿等の防長俳人の他、京都の蝶夢、広島島の風律、筑前の諸九・杏雨等の野坡門大家も発句を寄せている。刊記を欠き、序文中にも年次は示されていないが、巻軸発句を詠む杏雨の肩書に「七十七叟」とあって注目される。杏雨は明和元年閏十二月に七十八歳で没しているから（大内初夫「俳人青陽堂山崎杏雨」、『福岡県史近世研究編』、昭和六十二年）、本書の刊年は宝暦十三年と定められる（田中道雄氏示教）。

29 芭蕉百回忌募句ちらし

寛政五年刊 一枚刷 山口県文書館蔵
安部家文書のうち。寛政五年の四月十一日、南都蕉門の鼻中庵社中の志願によつて、同所元興寺の境内に「菊の香やならには古き仏達」の芭蕉発句を正面に彫りつけた菊塚が建立された。本点は、八月十二日の菊供養、十月十二日の芭蕉百回忌執行を前に、西日本の美濃派俳人に芭蕉追福句を募ったちらしである。投句をもとに追善集を刊行する計画もあったよう、一句につき一匁の投句料を求めつつ、二句以上の投句者には板本一冊を進呈すると断っている。

「取次」として京都の斗雪、尼崎の喜斎、山城の東塘、桜井の素糸・車蓋、伊丹の東瓦、伊賀の一枝、今井の魯郷、伏見の不酔、高砂の希舟、江州の暁宇、郡山の百之、大津の驥道、赤穂の双魚、豊前の祇川、筒井の羽石、大坂の一瓢庵、備前の素友、長崎の梅亭、南都の緩駕・眉山、防州の素文、吉野の可翠・一洞・和楽、長州の聴松庵、初瀬の三楽、以上二十三地域二十七名の名前があがっている。

防州俳人の募句取次を果たしていた安部素文は、周防美濃派の中心人物であったのであろう。末尾に「京都二条寺丁書坊 橘治」とあり、一連の事業を美濃派俳諧の専門書肆橘屋治兵衛が後援していたことも判明する。

なお、このとき建立された菊塚は、奈良市木辻町の称念寺境内に現存するという（石川真弘氏示教）。

30 菊舎牡丹画賛幅 田上菊舎筆

文政九年頃写 掛幅装一幅 山口県立山口博物館蔵
 豊浦郡田耕村に生まれ、萩藩士羽仁寛（俳号其音）を介して美濃派道統是什坊の門に入った田上菊舎は、諸国を旅して諸芸に遊び、公家・武家・儒者・文人と幅広く交際した。本点は、新茶贈呈に対する返礼として菊舎が筆を揮った牡丹の画賛である。上野さち子編『田上菊舎全集』（和泉書院、平成十二年）未収録。

発句は、「御茶玉はりしを謝し奉りて」と前書きし、「あらためて牡丹に薫る新茶かな 七十五齡菊舎」。「七十五齡」というが、菊舎は文政九年八月に七十四歳で没しているから、実は七十四歳時の作と推測される。七十歳を越えて落款に年齢を加えることが多くなつた菊舎に、「七十四齡」とする落款は一例もないという（真鍋聡「菊舎の落款について」、『菊舎研究ノート』第六号、平成二十三年四月）。忌み数として四の字を避けたものか。

31 菊舎真蹟由郡送別文 田上菊舎筆

江戸時代後期写 掛幅装一幅 山口県立山口博物館蔵

菊舎の父田上由永は、天明四年正月、長府藩御書物方を退役し、姓を本莊、名を了佐と改め、同藩に侍医として再出仕した（上野さち子「田上菊舎年譜」、『田上菊舎全集』）。由郡は徳山から本莊家に養子に入り、了佐の名跡と医業を継承した菊舎の義弟。本点は、医学修行に出る由郡に菊舎が送別の詩と俳諧発句を書き与えた懐紙である。『田上菊舎全集』未収録。

「送別」と題して「出門芳草美、臨別復何言、冷暖上池水、待君正可存」の五言絶句を三行書きに配し、続けて「友として益有のそのひとつとは、いづれの文にか聞へ侍りし。くす師のみち学びてんと旅立給ふ由郡ぬしを送別して」と前書きして、発句「撰び行百草の余の花の香も 一字庵」。

32 菊舎画翠竹賛蘭菊図 田上菊舎筆

文政六年写 掛幅装一幅 山口市歴史民俗資料館蔵
 長府藩十一代藩主毛利元義は、漢詩・和歌・狂歌・画・作陶・音曲の諸芸を操る才人で、梅門の号で俳諧にも遊び、菊舎と互いの立場を越えた深い交わりを結んだ。翠竹はその侍女で桂氏、笛・詩・書に通じていたという（上野さち子「人名・寺院名注」、『田上菊舎全集』）。本点は、菊舎画の蘭菊図に翠竹が「権秀三秋晚、開芳十楽中」との賛詩を寄せた作品で、「七十一菊舎」の落款により、文政六年の成立と知られる。『田上菊舎全集』未収録。

33 観翠舎記

江戸時代後期写 卷子本二卷 個人蔵

周防都濃郡須々万（現山口県周南市）の城重賢が緑山に構えた屋敷「観翠舎」をめぐる書画詩文集。近年改装の卷子本二巻に、安永―天保期に観翠舎を訪れた文人墨客の手にかかる懐紙三十一点を収録する。

重賢は雨文の号で俳諧をよくした。上巻には、徳山藩絵師朝倉南陵が描く緑山の致景に、徳山美濃派鼓吟社三世の雪筈仙が「みどり山や花にもはるを奪はれず」の俳諧発句を寄せた画賛が含まれる。下巻には、文政三年四月、観翠舎を訪れた美濃派道統友左坊が、雨文の熱心な俳諧修行に感じて「鶴逸夫」の号を授けた一文をはじめとする友左坊真蹟懐紙四点等を収める。

34 五条式板額 友左坊筆

文政三年写 杉板一枚 山口市歴史民俗資料館蔵
美濃派俳諧の会席の掟を墨書した杉板。天地三十糎、幅二十六糎。

裏面左右に設えられている嵌め込み式の溝は、正式俳諧の興行に際する掲示の便宜に設えられたものか。裏面に「文政三辰暮秋／友左坊（花押）」の墨書がある。道統友左坊の防長石行脚記念集『老の旅』によれば、文政三年九月当時、友左坊は三田尻周遊中であつたから、35とともに、防府連中に伝授されたものであろう。

表面には「五条式／一 諸礼停止／一 小語低声／一 出合遠近／一 一句一直／一 月花一句／右は、ばせをの翁旧式を増減して、貞享式の条目也」とある。

35 俳諧饗応板額 友左坊筆

文政三年写 杉板一枚 山口市歴史民俗資料館蔵
美濃派俳諧の会席におけるもてなしの心得を墨書した杉板。天地四十五糎、幅二十九・五糎。34のツレで、裏面には上下に嵌め込み式の溝があり、「文政三辰暮秋／友左坊（花押）」と墨書する。

表面には「俳諧饗応／一汁一菜たるべし。／右は、俚約を専らとするにあらず。客のころの安からんと、あるじの働きの静かならんとをはかりての掟といはむ」とある。山寺芭蕉記念館蔵の芭蕉筆会席掟は「小語低声」以外の四条を34と同じくし、さらに末尾に「又曰、飢食飢茶あるにまかせよ。酒乱に及事なかれ」と書き添える。美濃派俳諧の会席掟は、芭蕉自筆のそれに基づきつつ、美濃派流の修正を加えて定められたと思われる。

36 七部婆心録

万延元年頃刊 横本二冊 個人蔵
幕末期に活躍した原田曲斎による芭蕉七部集の注釈書。諸説を参照しつつ曲斎独自の解釈を展開する。六冊本が多く伝わるが、本点は薄様料紙に印刷された二冊本。

曲斎は徳山の人。同地の美濃派鼓吟社三世雪筈仙の門から出発したが、復古正風の提唱により異端視され、破門されたという。家業の小間物商を弟に譲り、みずから七草吟社を設立して蕉風俳諧の研究に没頭した（河村漣月『徳山俳諧史』、昭和三十年、私家版）。

37 貞享式海印録

安政六年頃刊 横本二冊 個人蔵

原田曲齋著の俳論書。支考編の芭蕉伝書『真享式』をもとに蕉門俳諧の作法を説く。六冊本が多く伝わるが、本点は薄様料紙に印刷された二冊本。

38 俳諧十論

享保四年頃刊 大本三冊 山口市歴史民俗資料館蔵

各務支考著の俳論書。総論から各論に至るまで、芭蕉の言説に支考独自の解釈をまじえつつ蕉風俳諧を体系的に論じる。支考は本書刊行後、「十論講」と称する講義を各地で開き、地方に俳諧を普及させた。美濃派俳諧の聖典とも言うべき書で、後世に与えた影響は大きく、注釈書や批判書が多く出現した。

四 座の文芸の民俗史Ⅰ 雑俳の流行と芭蕉句碑

雑俳とは、俳諧から派生し、俳諧以上に娯楽性のない文芸競技の総称である。雑俳は、山口では幕末から明治にかけて特に流行し、郊外の神社で祭礼の余興としてよく興行された。雑俳興行は会林と呼ばれる世話人が以下のように取り仕切った。会林は雑俳興行に先立って、地域の人々にあらかじめ前句や題を示す。人々は、一句五厘から一錢程度の投句料を支払い、硯箱・扇子等の景目当てに投句に応じた。投句締切後、会林は句を取り集め、作者名を伏せて一書に清書する。この清書作品集を「巻」という。会林は「巻」を選者に提出し、選者は会林の依頼に従って全体の一割程度の秀句に点

印を押し、さらに精選した「勝句」すなわち優秀作を「巻」の末尾に大書した。「巻」は、祭当日、勝句披露ののち、勝句作者に与えられたという。かかる雑俳興行は、神社への奉納という形態をとることで地域の連帯意識をつよめ、同時に、その言語遊戯が地域の教養を高める機会ともなっていた。

いっぽう、江戸時代後期から明治期にかけて、芭蕉句碑が山口各地の社寺境内に建てられている。これらの社寺には同時期に奉献された雑俳額が伝わっている事例も多く、芭蕉句碑の建立は雑俳の盛行と結びついた現象と考えられる。

39 黒山八幡宮奉灯卷

明治十一年写 半紙本一冊 個人蔵

吉敷郡鑄銭司の黒山八幡宮奉納の雑俳卷。天真斎春阿選。表紙に「明治十一年寅八月／黒山八幡宮奉灯卷／かい養民の瑞 会林白拝／天真斎春阿撰」と墨書する。

選者の天真斎春阿は野村氏、明治十年から四十年頃まで山口・吉敷地方の雑俳選を一手に引き受けるほどの勢力を誇った（内田伸『防長のしゃれことば 防長の雑俳』、防長民俗叢書発行所、昭和三十九年）。

40 河内社奉灯卷

明治十六年写 半紙本一冊 個人蔵

吉敷郡畑の河内社奉納の雑俳卷。天真斎春阿選。表紙に「かい昔語り 天真斎選／河内社奉灯卷／会林畑之春宍」と墨書する。

41 高倉社奉灯卷

明治期写 半紙本一冊 個人蔵
黒川の高倉荒神社奉納の雑俳巻。天真斎春阿選。表紙に「高倉社奉灯巻／大内村会林」と墨書する。

42 岩淵巖島神社奉納巻

明治期写 半紙本一冊 個人蔵
台道の岩淵巖島神社奉納の雑俳巻。無着庵石翁選。表紙に「岩淵巖島神社奉納巻／会林小齋清觴」と墨書する。

43 天真斎選句雑俳短冊

明治期写 短冊四枚 個人蔵
雑俳の勝句を選者天真斎春阿が清書し、その作者に褒美として与えた短冊。

44 芭蕉句碑（拓本・参考図版）

五 座の文芸の民俗史Ⅱ 祇園祭のなかの連歌

江戸時代、山口祇園会において、連歌は鷺舞にならぶ重要行事のひとつであった。すなわち、六月七日から十三日にかかる祭の期間中、毎晩百韻ずつ、総計七百韻の連歌が、米屋町の笠置堂で興行されていたのである。「笠着」とは、祭の参詣客が蓑笠をつけたまま着座の礼もとらず、口々に句を付けることで成り立つ形式の連歌である。

「七夜連歌」とも称された山口祇園会連歌の発句は、毎年、萩藩

主が詠むしきたりであった。また、その宗匠は、藩から任命された町衆や今八幡宮・仁壁神社の宮司がつとめていた。五月下旬頃、当年の発句七句を藩から下賜された宗匠は、毎月の稽古連歌に出席している山口連歌の連衆を招集し、発句定めの会を催して、連衆のなから各夜の執筆役を指名した。祇園会当日は、宗匠と執筆の二人が笠着堂に詰め、酒肴をとりながら祭客の句を付け捌き、夕刻から明け方までかかって百韻連歌を完成させた。完成した七百韻は、六月十四日の早朝、宗匠が御旅所の神前でよみあげて奉納し、宗匠は、事後、懐紙を清書して藩にも提出した（尾崎千佳「近世後期における山口連歌の興行と宗匠―仁壁神社新出資料を中心に」、『やまぐち学の構築』第五号、平成二十二年三月）。

七夜連歌は祭事であるとともに藩の行事であった。連歌は、為政者と民衆が同じ秩序のうちに生きてあることを、神明の前で確認する営みでもあったのである。

45 山口祇園会御作代発句懐紙

天保十三年写 懐紙一紙 仁壁神社蔵

46 山口祇園会御作代発句懐紙

安政六年写 懐紙一紙 仁壁神社蔵

山口祇園会で興行される七夜連歌の発句七句を墨書した懐紙。江戸時代後期、七夜連歌の宗匠をつとめた仁壁神社大宮司高橋家には、同様の発句懐紙が多数伝存する。

47 御連歌宗匠役諸控

文政八年写 半紙本一冊 仁壁神社蔵

仁壁神社大宮司高橋長秋による文政八年時の山口連歌宗匠役の記録。祇園会七夜連歌以外にも、仁壁・今八幡・今天神の正祭礼と今八幡の放生会に際して、法楽の連歌が興行されていた。各連歌の準備の過程や宗匠の果たすべき役割が細かく記録されている。

六 山口伝存の稀書 連歌懐紙・古俳書

48 賦何人連詞懐紙

享徳二年頃写 卷子本一卷 山口県立山口博物館蔵
室町時代中期張行および書写の連歌懐紙。上青紫紺の連歌懐紙を卷子に仕立てる。金茶色地牡丹唐草織紋絹表紙。見返は金箔押紙。本紙の四周を木賊色地に金銀青糸の不明紋様裂地で囲む。

端作はなく、賦物「賦何人連詞」。発句は法守の「待花にまづさしいづるわか葉かな」。連衆は、法守・宗砌・忍檐・行助・数信・盛舎・超心・顕諭・直清・量阿・久重・宗保（執筆）。

本百韻には他に伝本が現存しないが、原爆で焼失した旧制広島文理科大学蔵本には「享徳二年二月四日」と明記されていたらしい。すなわち、金子金治郎『新撰菟玖波集の研究』（昭和四十四年、風間書房第一編第三章「宗砌の生涯」に、「享徳二年二月四日には忍檐（量阿・超心・行助・超心・量阿・専順等を主なる会衆とする何人百韻（理科大学蔵本）に一座し、法守なる人の発句に脇をしている」とあるのがそれで、金

子氏引用に濁点を補って示せば、その発句・脇・第三は左のとおりである。

待花にまづさし出るわか葉かな 法守

春日がぐれの露の下草 宗砌

谷風の深雪吹とく音冴て 忍檐

表記に若干の違いはあるものの、発句および脇について、山口博物館本と広島文理科大本の間に異同はない。ただし、山口博物館本の第三には次のような見せ消ちがあつて注目される。

谷風の深雪吹とく音はして 忍檐

いったん「音はして」で治定した句形をのちに「音さえて」に改めたことが知られるが、山口博物館本には他にも二句に見せ消ちを認める。

浪ぞ花なるうらのしまぐ 砌（二折表第八）

さし田の稲のほにいづるころ 超（挙句）

「うらのしまぐ」を「春のしまぐ」に、「ほにいづるころ」を「ほにいづる時」に訂するのは、第三の見せ消ちと同様、句意に関わる改変であつて、後代のものではなく、百韻満尾直後に加えられた修正と考えるべきであろう。見せ消ちとは本文とは異なる筆蹟で一筆、連衆の顔ぶれに徴して、その筆者は宗砌の可能性が最も高い。しかも、全容不明ながら、広島文理科大本の本文は、山口博物館本の修正後の本文を反映していたようである。広島文理科大本に記されていたらしき張行年次「享徳二年二月四日」を信ずれば、山口博物館

本は、享徳二年二月四日よりさほど降らない時期に、宗匠宗御の点検を請うべく書写された懐紙であったと推測されてくる。張行年次の記載を欠くことに鑑みても、山口博物館本は清書本の下書きであったのではなからうか。

ともあれ、享徳二年当時の宗御は北野社連歌奉行および宗匠の地位にあり、連歌の中興宗御出座の連歌としても、室町中期の連歌懐紙の遺例としても、すこぶる貴重な資料であることは疑いを容れない。

49 賦何垣連歌懐紙 里村紹巴筆

永禄十二年写 卷子本一卷 個人蔵

永禄十二年閏五月八日張行連歌百韻の懐紙。句に応じた素材を金銀泥で下絵に描いた装飾懐紙に、連歌師里村紹巴が本文を清書する。藍色網目地に梅松紋様絹表紙。金箔押紙の見返に彩色で杉木を描く。

端作「永禄十二年閏五月八日」、賦物「賦何垣連歌」。発句は紹巴の「冬はよしありともなつや門の竹」。連衆は、紹巴・聖碩・慶典・昌叱・禅興・玄哉・心前・英怙・堯敏・宗仍・宗節・常教・宗規・康清・蔵円・梅寿（執筆）。新出百韻。連衆は永禄一元年間によく紹巴と同座した顔ぶれが揃う。

本百韻張行直前の永禄十二年閏五月二日、紹巴は飛鳥井中将邸の歌会に昌叱・心前とともに出座し（『言継卿記』）、閏五月二十四日には『天橋立紀行』の旅に出立している（奥田勲「紹巴年譜稿（一）」、『宇都宮大学教育学部紀要』第十七号、昭和四十二年十二月）。

50 仮御手鑑

手鑑一帖 山口県立山口図書館蔵

長府毛利家旧蔵の手鑑で7『手鑑萬代帖』のツレ。『手鑑萬代帖』が書簡等の文書を収めるのに対し、『仮御手鑑』は和歌・連歌・俳諧・漢詩を染筆した短冊・色紙・古筆切等の文芸資料百八十五点を収める。田村哲夫「山口図書館本『仮御手鑑』について」（『山口県文書館研究紀要』第四号、昭和五十年三月）参照。

小槻伊治代筆にかかる大内義隆和歌短冊をはじめとして、義隆被官人等による上青下紫の続歌短冊が多数収録されている。古筆了眠の極札に三十六名を「連歌師」とするが、もとより職業連歌師の意ではなく、大内家中の連歌作者と理解すべきであろう。

51 紅梅千句

明暦元年刊 横本一冊 小田家博物館蔵

小田家は屋号を室屋と称する岩国藩領柳井津町金屋の豪商。俳諧を嗜む人があったようで、小田家文書には古俳書の善本が少なくない。

縹色疋繫牡丹唐草紋様艶出表紙の左肩に、四周双辺子持枠の原題簽「貞徳翁紅梅千句」^全を貼付する。原題簽を留める伝本は他に天理図書館綿屋文庫本しかなく（安藤武彦「紅梅千句」解題）、近世文学資料類従古俳諧編『正章千句・紅梅千句・貞徳誹諧記』、昭和五十年、勉誠社）、貴重。摺りも美しい。内題「紅梅千句」。単郭。刊記「明暦元年癸五月吉日／敦賀屋久兵衛開板」の真下の匡郭に明らかな埋木の跡を認

める。

52 毛吹草

江戸時代初期刊 横本三冊 小田家博物館蔵

七巻五冊本のうち後半三巻二冊分を欠く。濃縹色無地表紙左肩に無粹の原題簽「新毛吹草」を貼付する。内題「毛吹草」。無郭。一面十三行。一面十五行の無刊記初印本とは明らかに版が異なり、明暦元年もしくは万治二年板と目されるが、未詳。後考を期したい。

首巻の後見返に「小田六左衛門」の墨書識語があり、天明元年に小田家四代目当主を嗣いだ六左衛門の集書と知られる。

53 西山宗因釈誹諧

延宝二年頃刊 横本一冊 小田家博物館蔵

縹色無地表紙左肩に無粹の原題簽「西山宗因釈誹諧」を貼付する。内題「釈教俳諧」。無郭。後見返に「木寸」の墨書識語がある。

従来知られていた天理図書館綿屋文庫蔵本と題簽・本文ともに同版であるが、綿屋本とは表紙の色と天地法量を異にする。すなわち、綿屋本表紙は墨色で、その天地法量は小田家本より二耗程長い（天理図書館綿屋文庫俳書集成第二十五巻『西山宗因集』参照、平成十年、八木書店）。小田家本は摺り・保存状態ともに綿屋本にすぐれ、宗因俳書の善本として貴重。

54 山の井

慶安元年刊 横本四冊 小田家博物館蔵

巻第一欠。濃縹色無地表紙左肩に四周双辺子持粹の原題簽「山の

井」三を貼付する。内題「山之井」。単郭。刊記「慶安元子戌曆／南呂吉日 重開板」。

55 おくのほそ道

寛政元年刊 枡型本一冊 小田家博物館蔵

松葉ちらし紋様表紙中央に無粹の原題簽「おくのほそ道」を貼付する。刊記「寛政元年酉仲秋再板／諧仙堂蔵板／洛陽蕉門書林／井筒屋庄兵衛／橋屋治兵衛／浦井徳右衛門」。前見返に「文政六未三月、上京之節求之／小田乍豊」、後見返にも「文政六未三月／小田乍豊」の墨書識語を有する。